



じよフリ
けんじよ
けんじよ
すたまの
あそび



須玉HITO文庫

へぼ追い

へぼとは、クロスズメバチのことで方言で「へぼ」と呼ぶ。へぼ追いは、この蜂の子をとるための遊びである。季節は、夏から秋。用意するものは、真綿とエサになるカエルの肉（または鶏肉）、「煙幕」とカマ、それに軍手だ。へぼは、巣を作る時、その表面を松ヤニで固めるためカラ松の近くに飛んでくる。まず、皮をはいだカエルを棒にさして、松ヤニをとりしてきたへぼにかざす。その肉をかみきって、巣まで運んだへぼが、味をしめてまたカラ松に戻ってくるので、今度は、五〜六ミリに丸めたカエルの肉を真綿にくくりつけたものをつかませる。つかませたら、さあ、へぼ追いはじまりだ。真綿のすそは糸状になっているので、その白い綿から片時も目を離さず、ひたすらひたすら追いかける。遠ければ一〜二キロ走ることもあるのだ。巣の近くまでくるとへぼは身じたくを整えるため一度止まる。巣穴に入っていくのを見とどけたら、ここで煙幕の登場だ。巣穴に煙幕を差しこみ、へぼが気絶したらカマで巣を掘り起こす。気絶している間にへぼを落とし、数段に重なった巣を手に入れる。

へぼ追いは、へぼの行く手に何があるうともへぼ一筋にまっしぐら！である。

(注) 1
煙幕
煙だけがもうもうと出る花火の一種

(注) 2
へぼは地蜂ともいい、地中に巣を作る。

(注) 3
蜂の子をとり出したら、しょう油と砂糖で辛甘く炒り煮にしたり、バター炒めにしたたりする。貴重な山里の味である。



いっこじよ

土や小石、小枝や葉っぱ……。子供たちの遊び道具といえば、家のまわりに転がっている自然素材。あとは平らな地面が少しあれば「陣とり」や「棒たおし」、「棒かくし」など、いろんな遊びができるのだ。

その中でも小石さえあれば遊べる「いっこじよ」を書き留めておきたい。

「いっこじよ」は、まず小石探しから始める。小さくて丸くて手に取りやすい石が最適だ。場所は、土がほどほどにかたくなって平らなところ。たとえば軒下や庭のはじっこにペタリと座り込んで遊ぶ。

一人二十個くらいの小石を集めてきて山に積んでおく。まず、片手で小石をすくい、上に放り投げて手の甲で小石を受ける。その小石をまた上に上げて手の平でつかむ。全部つかめれば自分の持ち石になり、その中から親石を決めて「いっこじよ」がはじまるのだ。すべて片手で進める。親石を三回投げた間に、積んである石の中から小石を寄せていって、三でいっぺんにすくって親石を受ける。その数を一から順に増やしながら取っていく遊びだ。石を投げる時「いっこじよ」「いっこじよ」「さんこじよ」……と歌いながら



石を取っていき、
取った石の数で
勝敗を決める。

手が大きい子
に勝つには、小
さな取りやすい
石を選ぶのがコ
ツ。

小指側の手の
平は、すり傷だ
らけだったが、
飽きずによく遊
んだものだ。

花いちもんめ

学校からの帰り道を急ぎながら、毎日遊びの計画を練る。男の子が一緒にいれば「かくれ座敷」や「戦争」といった二組に分かれて探しっこをする冒険的な遊びが多く、女の子ばかりだと「かごめかごめ」や「あぶくたつた」。「花いちもんめ」のような一定の場所で繰り返し楽しめる遊びが多かった。

遊び仲間、同じ学年だけでなく年齢層も広いので、上級生が下級生をいたわりながら遊びのルールを教える。小さい子には、「みそっかす」というルールをあてはめ、無理はさせないのである。

こうしてあの頃を思い出していると次々に「懐かしいなあ」の声があがる。「花いちもんめ」で、最後まで相手チームに名前を呼ばれなかった時はむなしかったとか、「かごめかごめ」では、鬼になった時うしろの正面にいる仲間を何回やっても当てられなくてくやしかったとか、「あぶくたつた」では、最後の「トントントン何の音」のあとに「おばけだぞお」といって鬼が追いかけてくる。そう、あの瞬間は結構スリルがあった、などなど口々に語り合いながら、みんなの顔も自然とほころんでいく。

(注)「みそっかす」とは、鬼ごっこやカンけりなどの体力的に差がついてしまう遊びに年齢の低い子が加わる時に使うルール。その子に対しては、つかまっても鬼にならないとか数に数えないなどの方法を取り、遊びの楽しさを教えていく。

ふもつとまごめて花いちもんめ
勝てうれしい花いちもんめ
負けてくやしい花いちもんめ
隣のあぶくたつたと来ておくれ
鬼がこわくて行かない
お鍋がぶてないと来ておくれ
お鍋底抜け行かない
お布団がぶてないと来ておくれ
お布団ボロボロ行かない
あの子がほしい
あの子じゃわからん
この子がほしい
この子じゃわからん
相談しよう
そうしよう
みちちゃんがほしい花いちもんめ
まゆみちゃんがほしい花いちもんめ
じゃんけんぽん



